

# 牛の2大持続 感染症を学ぶ

—牛ウイルス性下痢と牛伝染性リンパ腫—

2023.7.12 水

13:30~16:00(13:00開場)

場所:宮崎大学木花キャンパス農学部講義棟1階103教室

開催形式  
対 面

参加費  
無 料

事前予約  
不 要

定 員  
100名

主催:宮崎大学産業動物防疫リサーチセンター防疫戦略部門

共催:宮崎大学農学部獣医学科

## 日本における牛ウイルス性下痢の 浸潤状況とその対策について

講演者 | 磯田 典和  
(北海道大学大学院獣医学研究院微生物学教室)

牛ウイルス性下痢(BVD)は主に牛で発生する慢性消耗性のウイルス疾患であり、その疫学的特徴として、妊娠時に母牛がBVDウイルス(BVDV)に感染すると、ウイルスが経胎盤感染することが知られている。これは胎子の流产および発育遅延による直接的影響の他に、免疫寛容による持続感染牛の産出が農場の汚染源となり、BVDの感染拡大を引き起こすことが生産者に大きな被害を与える。北海道を中心にBVDの発生は全国で報告されているが、全国的に遺伝子型BVDV-1bとBVDV-2aが流行していることが分かっており、ワクチン接種を中心としている我が国のBVD対策では抗原性の合った適切なワクチンの接種が重要である。またBVDの発生拡大には動物の移動が重要な要因であり、それに対する対策の強化も急務である。

## 牛伝染性リンパ腫ウイルス感染症の 制御に向けた検査技術の進化とその応用

講演者 | 野津 昂亮  
(宮崎大学農学部獣医学科産業動物伝染病防疫学研究室)

牛伝染性リンパ腫ウイルス(BLV)感染症は、感染牛に乳量低下、受胎率低下、悪性リンパ腫の発症を引き起こすことから、牛の生命と畜産現場の経済を脅かす問題となっている。BLVに一度感染すると治癒することはなく、生涯ウイルスを排出し続ける。BLVに対する有効なワクチンも存在していないことから、本感染症の制御には感染牛から他の牛に感染させない環境を作ることが重要である。それには、検査によってウイルスを大量に排出する牛を摘発することや、生まれつきBLVに強い体質を持つ牛を活用することが有効である。本講演では、BLVの感染量や牛の体質を判別する検査技術とその活用法について解説する。

お問い合わせ先

宮崎大学産業動物防疫リサーチセンター防疫戦略部門 関口敏  
TEL:0985-58-7676 E-mail:sekiguchi@cc.miyazaki-u.ac.jp